

【音楽科】教科提案

楽しく学ぶ音楽の基礎・基本 (第2年次)

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 音楽科でめざす子どもの姿

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・作りたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「友だちと一緒に歌ったり演奏したりしたい・友だちが好きな音楽にも興味がある・友だちの音楽表現にも興味がある・気持ちを込めて音楽を表現したい」子どもをめざす。

そのためには、音楽的「知識(knowledge)」「技能(skill)」「能力(ability,capacity)」の3つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。

音楽的「知識(knowledge)」「技能(skill)」「能力(ability,capacity)」の3つが、
音楽的関心と意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

これら3つの力を身につけることで、自分に合った生活スタイルを見つけ、自分を音楽で豊かにし、生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり、友だちとのかかわりからも自分の音楽的世界を広げていったりする子どもが育つと考えている。

本校の子どもたちに目を移すと、よく歌いよく表現する。これには「リクエスト・タイム」(全学年で個人持ちの歌集・3訂版『歌はともだち』から子どもたちのリクエストで歌う活動)が大きな効果を生んでいるからだ。歌のレパートリーが非常に多く、音程を正しく取ることができたり、聴いてすぐに歌えたりする子どもがほとんどである。

しかしながら、楽曲を成り立たせている諸要素を比べて聴いたり、思いや意図をもって音楽的に表現したり、音符や記号から音を思い浮かべて表現したりする活動では、まだまだ課題が多い。そこで、昨年度より低学年から「器楽」「音楽づくり」の基礎となる音符や記号、読譜をドリル的な扱いも含め少しずつ行っている。連続して「書く」ことで定着を試み、「作る」活動から視奏力を高め、高学年での旋律づくりやふしの重なり学習へとつなげているところである。

2. 音楽科学習における「学びの質の高まり」

音楽科学習における「学びの質の高まり」とは、①学習したことを駆使できるようになることと、②学び続ける目標がもてること、すなわち音楽の学習を通して基礎的・基本的な知識、技能を確実に身に付け、活用力を育むとともに、目標感をもってさまざまな音楽とかかわりをもつことだと捉えている。

ここで新学習指導要領(平成20年3月告示)に記載された〔共通事項〕(抄)に着目したい。

- ・音楽を形づくっている要素を聴き取り、面白さ、美しさを感じ取ること
- ・身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること

〔共通事項〕は思いや意図をもって音楽を表現したり鑑賞したりするための基になると捉えることができよう。これらは、すぐに身に付くものではなく、定着するためには繰り返し指導を行う必要がある。加えて具体的に「書く」という活動も必要となる。そこで昨年度に引き続き系統性をふまえた音楽づくりカリキュラムの作成を行う。「再構成」や音楽づくりを通して、音符を読んだり書いたりする機会が増える。また、音に表すことによって、感じたり気付いたりすることも増えていくと思われる。

ここでは、音楽をまねたり、比べたり、選んだりというような順序立てたスモールステップを積み重ねることにより、子どもたちが楽しく自然に先に記した音楽的な3つの力を身に付けるようにしていく。

さらに、子どもたちの活動を活性化し、習得した内容を活用できるようにするため、学習シートや楽譜カードを準備したり教科書教材にプラスワンの工夫を加えたりして学びの質の高まりを支えたい。

課題A 《4つの活動領域》「歌唱」「器楽」「創作（音楽づくり）」「鑑賞」→質の高い教材

課題B 《育てたい力》音楽的「知識(knowledge)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」
*「関心・意欲・態度」は上の3つを支えていて不可分である。

課題C 《質を高める指導法等の開発》

◆本研究で明らかにすること

課題A「どの教材で」⇒課題B「どの力を」⇒課題C「どのようにすれば」育つか

【共同的な学びをつくる】

子どもの学びの姿を、心理的な基盤を大切にしながら子どもの相互作用を生かして総括的に観ていく。ここで大切なことは、活躍する一部の子どもたちではなく、「すべての」子どもたちが学習内容をきちんと身に付ける「学び」を、如何にして可能とするかである。

音楽科においては《「感じ」を共有・「気づき」を課題に》をキーワードに、これまでも子どもたちの心理的な基盤を大切に「全員が分かる授業」をめざし取り組んできたところである。

例えば、広範な教材収集と教材提示の工夫・発問の工夫、情報を共有するものとしての「黒板」の開放や、各自の意見を明らかにする「挙手法」、自由な雰囲気意見交換する「バズ学習法」等々である。昨年度に続き、課題プリントの活用やペア学習を含む小集団グループ学習を取り入れることによって、お互いが「関係性をもつ」学習から個々の「学び」の成立に迫りたい。

3. 研究の展望

(1) 【研究の内容と範囲】

◎子どもたちが「自分を音楽で豊かにする」ために、

- ①授業前において、ねらいを明確にして広く教材の収集・選択・制作に努める。
- ②教材提示の工夫で音楽への関心・意欲を高める。
- ③授業展開の中で、少しずつ「自己決定」をさせながら音楽とのつきあい方を身に付けたり、技術的な困難さを克服したり、自分から進んで音楽に取り組もうとしたりする態度を育てる。
- ④心身の発達に合った学習指導過程を組むことで、豊かに音楽を感じ取る心を育てる。

◎《工夫して音楽を表現する》ために、

- ⑤聴き比べたり、表現して比べたりする活動から、音楽的な判断力を養う。
- ⑥音楽の様々な組み立て方（順序性やしきみ）を、聴いたり表現したりする活動から、音楽的な思考力として定着させていく。「低学年：リズム→音の長さ／高学年：再構成→音楽の仕組み」

◎さらに《生涯音楽への基盤》を保障するために、

- ⑦教材に（視覚的な）モデルを用意して、子どもたちに目標感をもたせる。
- ⑧小・中学校を通した学びのひろがりや、（小学校側から）意図的に用意する。

(2) 【研究の方法・研究評価の手だて・適切なみとりと支援】

- ①全学年を対象として発達の段階に応じて《知識・技能・能力》に焦点を当てる。
- ②課題（学習）プリントの使用による子どもたち相互の多様な「気づき方・感じ方」の発見。
- ③場を設定する。＊座席配置の工夫。→（男女）ペアによる教え合い。→グループ学習へ発展。

(3) 【研究評価の視点】

- ①課題プリントの使用や一覧表示によって、すべての子どもたちの学びが変化したか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたか。また学級の子どもたちの学びが、客観的に変化の様相を見せたといえるか。
- ②座席配置の工夫や子ども同士を結びつけることで、すべての子どもたちに学習の深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたか。